

報

小天地

韓人先天的劣等人類の如く
に思ふは抑も誤れり、史上に
求むるに坂上田村麿の如き、
見島高徳の如き孰れも韓化韓
人の後なりと云ふ近頃は韓
人の石川の令尹等宗族の如き
も其先は韓人に出でしなりと
言、現地の韓人が天興の才幹
能力を發揮する能はざるは全
く境遇の然らしめしもの、此
點に就て日韓合併は彼等に偉
大なる希望を與ふるのべし

葬役所は九月十一日より分署、東原分教場に於て九月十一日より、長岡村に於て九月十一日より、吉井司官は葬役所へ、玉川副官は葬役所へ、内一名は既に死亡し残り四名は住宅治療すること、一名は關野病院に入院加療中なるが尚ほは其経費とし、葬役所の模倣あり



くがんぶ女少

万壽子のお祖母さん

まあちゃん記

それから、まあちゃんはいつものやうに學校へ行きましたか、お友達を誘つて御一緒に奇麗に飾つたお雛はんの前で、おま、こゝして遊ぶつもりで歸つて來ますよ、家ではお祖母さんが御大病だといふので大騒ぎして居るに、こゝでい

まあちゃん驚いて了つて、もうおまゝこゝで居てはありませぬ、お友達に歸つて頂いて大急ぎで隠居所へ駆けつけて見ますよ、お祖母さんは高枕で苦し相に、ウーンウーン呻り通して、其お顔の色つたら全く眞蒼でした。
父様も母様もご心配相に座つて被在います。
『お祖母さんは病氣ですつてねえ、如何なすつたんでせうね、甚く?』
そつと母様のお傍へ寄つて訊きますと、『随分お苦しいやうな様子なんだよ、先刻録田先生へ左様云つてお迎ひにやつたら、今に來て下さるだらうがね、如何なすつたのか、お年がお年だから心配でねえ』
母様は小さなお聲でお話しなさいました、左様するうちにウーンウーンなつて、お祖母さんは大層お苦しうで被在います。
『如何なすつたんだらうねえ、今朝迄あなたにお元氣だつたのに、急に斯様お悪くおなりなすつて、一轉まあ如何した譯だらう』
家の者は皆な誰も不思議に思つて心配して居りますよ、其處へお醫者様の録田先生が被入いました。而してお祖母さんのお脈搏をさつて見たりお胸を見たりして被在いました。
『ナニご心配ありません、別に大した御病氣でもないやうですから……何か、おちんちのやうなものでも過ぎたかと思はれますが、そんな風なものをおあけになりましたでせうか』
とお訊きになりました。
『左様でございます、今朝程實はお節句の御祝儀にお菱を焼いてあげましたが小供にお給仕させまして、丁度それ位頂きましたか解りませんけ……ねえまあちゃんやお祖母さんは幾つ召上つたの、一つかい、それとも今半分も召上つて?』
『否、もつとよ母様ね、五つ』
まあちゃん録田先生がおちんちの食べ過ぎのやうだといふ有つたもんですから其時から自分がお給仕したのに、無暗に澤山差上げて悪かつたかしらと考へて居た處へ、今又母様から一つかい、それとも一つ半位かと訊かれて、全くいけない事をしたと後悔しましたけれど、まさかうそをつく譯にも行かず、正直に本當の事を云つてしまひました

東洋人の曲線美は相摺り肌の
肌にないて代表さるべく、蓋
々壯義の矯致なりと云ふ。旋
々谷の豊滿にして常陸山の端
麗なる、殊に我が太刀山の浩
快なる、或は然らん、吾曹は
唯期の東洋的曲線美を寫生し
研究せんとする美術家の無き
を憾む(冷)

二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	高岡の	たかおか
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	助七郎	すけしちろう
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	腸窒	てうしつ
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	扶斯	ふす
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	本年の	ほんねん
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	初發	しつぱつ
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	總	そう

東洋人の曲線美は相摺り肌の
肌にないて代表さるべく、蓋
々壯義の矯致なりと云ふ。旋
々谷の豊滿にして常陸山の端
麗なる、殊に我が太刀山の浩
快なる、或は然らん、吾曹は
唯期の東洋的曲線美を寫生し
研究せんとする美術家の無き
を憾む(冷)

二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	高岡の	たかおか
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	助七郎	すけしちろう
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	腸窒	てうしつ
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	扶斯	ふす
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	本年の	ほんねん
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	初發	しつぱつ
二 五 六	四 三 六	六 三 六	二 五 六	總	そう

仕方のないものですねえ。」
「御免下さい。」
まあちやんは心から濟まない氣がして、
託しました。
「併しお祖母さんよく召上つたね、今更
つから決して小供まかせにしないで、お
前がよく注意しなきや駄目だ、どうせお
祖母さんは皮り通りもろくして、いつか

しやるし、小供の事なら、呉れるぞ仰有りや幾らでも差上げるに無理もなからさぢやないか、ねえまあちやん心配しないうでもよろしい、お祖母さんは今によくぞなんなさるからね。』

『ええ大丈夫直ぐに御全快です、只少し胃が悪い位なんですからね。』

父様と鎌田先生と二人に慰められて、まあちやんは幾らか安神しましたが、どうにも濟まない氣がして堪りません。祖母さんがあんまり喜んでおいしさに召上るもんだから、ついお喜びなさるお顔が見たさに何の考へもなく、あそこらあさからと焼いて來ては差上げたのでした。

『先生、後生です、どうぞ早くよくなるやうに、好いお藥あけて頂戴な。』

まあちやんはもう一生懸命です。

『よーござんすとも大丈夫、御心配なさらないでよろしい。』

鎌田先生は斯様仰有つて、まあちやんの頭をお撫でなさいました。而して父様に『お老人の事ですから苦いお藥を差上げ嫌な思ひをおさせ申すのもお可哀相です、いっそ水飴を買つておあげになつて頂きませう、水飴は大變消化をよくするものですから、けつく苦いお藥より其方が好いかと思ひます。』と仰いました。

『水飴位でよくなりますでせうか。』

大抵大丈夫だと思ひます、ナニほんの寸と胃に異狀を起しただけなのですから大丈夫です。』

早速水飴を買つて來てお祖母さんに差し上げました。

お祖母さんはウンウン呻つて被在いしが母様が、

『ハイ水飴です、召上れ。』

仰有つて、お箸にくるく巻きつけたをお口の處へ持つて行つてお上げになりましたら、嬉れし相にしやぶつて、齒のないお口でもぐぐ召し上りくしました。

るうちに何時の間にかお眠りになつて度お目が覺めた時にはもう御病氣はすっかりよくなつて被在いました、

それから云ふもの、お祖母さんは鎌田先生が大好きで水飴で病氣をなほす大變名醫だと仰有つて、お風を召した時で何でも鎌田先生をよんで呉れとはかり有いますの、而してお藥の代りに水飴を召し上るので、家中大笑ひでござ

たのかい、まあ本當に驚ろいて了ふよ此
見は、だからお祖母さんが御病氣にもお
なりなざる筈ですわえ、小供つて本當に

「オヤ、それぢや
お前五重皆な差上り
二 祖母さん
まあちゃん記

万壽子のお

